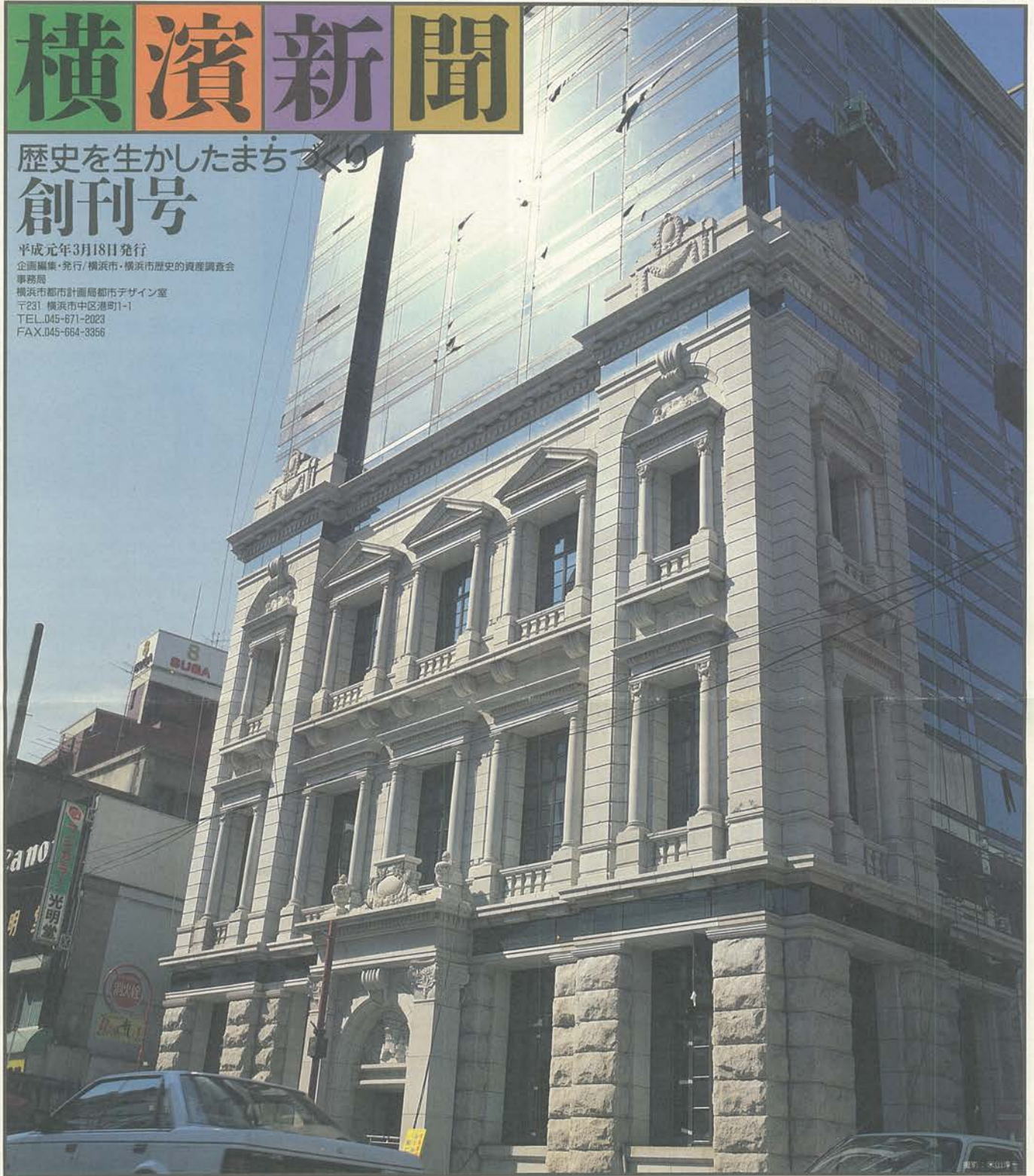


# THE CITY OF YOKOHAMA

## 横濱新聞

歴史を生かしたまちづくり  
創刊号

平成元年3月18日発行  
企画編集・発行/横浜市・横浜市歴史資産調査会  
事務局  
横浜市都市計画局都市デザイン室  
〒231 横浜市中区港町1-1  
TEL.045-671-2023  
FAX.045-664-3856



### 日本火災横浜ビルに学んだこと 村松貞次郎

(法政大学教授・横浜市歴史資産調査会顧問)

日本火災横浜ビルの外壁が完成した。おめでと、と言うのも気恥ずかしいほど私自身ものめり込んでいた建物だけに感慨ひとしおのものがある。そこでその「日本火災横浜ビル保存調査委員会」の一員として、この機会に私自身が学んだこと、反省したことを記しておく。

私がかねがね、こうした近代建築の保存・再利用は「保存ではない、創るのだ」と考えてきた。このビルの場合でも外観・外壁の凍結的な保存ではダメだ。ビルそ

のものも環境も活性化する必要があるとして、旧正金(現県立博物館)側の外壁は隅部と1階だけをそのままにしたのも、そうした私の考えに関係者全員が同意して下さったおかげである。しかし取り外した壁の石材が50%以上も使用不可能だったこと、外壁保存は看板を出し難い、ショーウィンドーがたれない、などテナントを入れるビルには非常なハンディ・キャップを強いることなどは、私のような書生には思ってもみなかったことだけに深刻に反省するところがあった。それと、これは旧法務省庁

舎の保存・活用の委員会で痛感したことだが、古い建物の外壁は適当に古いままがいいと言うこと。人間に譬れば老人は老人の顔がよい。

それにしても日本火災さんには大きな負担をおかけした。こうした文化のための負担は損金で落とせるように税制を改めるべきだ、との高本文雄さんのご意見を私は深刻に受け取っている。

#### 日本火災横浜ビル(保全改修工事完成)

同ビルは矢部又吉設計、大正11年竣工。ドイツルネサンス風の重厚な外観をもち、隣接する県立博物館とあいまって、独特の景観を形づけていた。昭和62年より行なわれた改修工事では、馬車道及び弁天通り側の2面のファサードを保全しつつ機能の更新を図るという方式が採られた。

# NEWS

## 旧エリスマン邸 元町公園に復元

かつて山手127番地に、スイス人の生糸貿易商として戦前の横浜で活躍したエリスマン氏の自邸があった。設計は、日本の近代建築の父ともいわれる建築家A.レーモンド氏。白い下見板の壁に緑の屋根が美しい洋館だ。だが、昭和57年夏マンション建設のため取り壊されることとなり工事が着手



## 保土ヶ谷の民家、 解体保存



石崎家住宅は、保土ヶ谷区上菅田の茅葺民家。明治35年生まれの石崎太市氏が17歳のころ建ったというから、大正7年ごろの建築である。柱は樺、梁は松、16畳の広さの土間からは、がっしりとした小屋組が見える。茅葺の屋根は、西面を寄棟、東面を軒の切り上がったツマカブトとした印象深いデザインである。

昨年夏、石崎家では住宅を新築することになり、この民家を取り壊さなければならなくなった。しかし、石崎氏はまだまだ丈夫な建物がこのまま消えてしまふのを惜しんで、市に部材を寄附され、建物の解体保存作業が昨年秋に行なわれた。

石崎家住宅は、桁行7間・梁行4間、約95㎡の広さで、その1/3を土間としている。プランは“田の字型”と呼ばれる形式で、全体的に改造も少なく、現存中は近所の園地から訪れる見学者も少なくなかったという。

された。山手でもやや奥まった所にあり、その存在すら知られていないものであった。新聞紙上にこれを惜しむ近隣の人の投稿があったのがきっかけとなって、所有者の協力で解体調査が行なわれ、その部材は横浜市に寄附された。

このたび同邸は元町公園内の施設として、山手本通り沿いに復元されることとなった。春から準備工事にとりかかり、来年には再びその端正な姿を横浜市民の前に現す。(仮称)山手洋館資料館として、応接間や居間などの内部も復元されるほか、洋館の歴史に関する展示室が設けられる。

周囲には、洋館がよく残されており、またブラフ80メモリアルテラス(震災で倒壊した明治の洋館跡)などがあり、エキゾチックな雰囲気も漂う山手の丘にまた新しい魅力が加わることになりそうだ。

## 元町公園でジェラルルの 地下貯水槽を発見



中区の元町公園は「水屋敷」と呼ばれる一帯であった。ここでは、「ジェラルル瓦」で知られるフランス商人A.ジェラルルが瓦や煉瓦の製造とともに、船舶への給水事業を営んだところ。昨年6月、この地下から幅3m、奥行10mに及ぶカマボコ形の、2槽の煉瓦造貯水槽が発見された。2つの貯水槽はアーチでつながり、その貯水容量は約120トンに及ぶ。

この施設は、谷戸の湧水を集め、不純物を沈澱させるために作られたものと考えられ、同種の遺構がないだけに、全国的にも貴重な発見。100年以上を経て、姿を現したこの貯水槽、ジェラルル亡き今も、湧水をたたえ続けている。

## 地域のシンボルに 市民の愛着 神奈川区大口通、 旧佐藤氏別荘

洋風建築と唐破風——見、不思議な組み合わせだが、神奈川区大口通の旧佐藤氏別荘は、その両方を持ち合わせた“和洋折衷”の建物だ。内部の天井や建具枠など細部のデザインは洋風だが、玄関には和風の意匠の代表ともいえる唐破風を付けている。この建物は、明治36年の地図にすでに描かれており、地元のお年寄りの話と合わせると、



明治30年代前半の建築で、民間のものとしては市内最古の木造洋風建築の可能性が高い。

正式な西洋建築を知らない日本人の工夫が、見よう見まねで建てたものらしく、いかにも明治期らしい気風が感じられる。

当時の持ち主は明治の名裁判官として知られる佐藤博愛氏。外国人居留地撤廃を決めた明治32年の日米修好通商条約改正の当日、アメリカ人口バート・ミラーによる殺人事件がおき、佐藤氏はこの事件を担当。「法律と正義とは如何なる事情の下に於ても厳正に維持せらるべきこと」を主張し、ミラーに有罪の判決を下した。

この建物は持ち主が転々とした後空き家になり、昨年12月マンション建設のため取り壊されることになったが、地元からの強い希望で部材の保存が決まった。

## アパレルメーカーが 山手の洋館を ファッションビルに活用



ヨシエイナバなどのOCブランドで有名な、あのBIGグループが山手46-A番館を保存、ショールームとしてオープンさせ、注目されている。オーナーは同グループの傘下である「聯ディグレース」。同社の代表ブランド「Papas」を中心とした気品ある大人の雰囲気を出したワードローブが揃い、洋館のシックな内装によく似合っている。

同社がこの洋館を入手したのは3年前、当初マンションに改装しようかという計画もあったそうだが、洋館の良さを生かそうと63年春保全改修に着手。それまで荒れ果てた空き家だったものを見事に再生させた。

同館は昭和初期の代表的な洋館の意匠をもち、山手本通りのカーブに面した好立地から、山手でも一段と光る存在になっている。

## 故バーナード氏の オリジナル家具、 横浜で生きる。

家を建てるなら、家具も一緒に造ってしまおう。今では考えられないような住生活を営んだその人、E.V.バーナード氏は1911年の横浜生まれ。お父さんC.B.バーナード氏は開港直後の横浜ハイギ



リスからやってきて、お茶などの貿易で活躍する一方、横浜各地の風景をキャンバスに描き多くの美術作品を残した。父君の趣味を受け継いだバーナード氏は、1936年自宅を本荘に新築するときに、家の設計を友人の建築家J.J.スワガー氏に依頼、彼と相談しながらお気に入りの洋館をつくり、家具も自らデザインし、横浜の家具職人にオーダーした。

今もその洋館は健在で、ハーフデンパーにらせん階段をもつ独特のデザインを見せている。バーナード氏の没後、そのベターハーフとも言えるオリジナル家具たちは、遺族がそれぞれ持っている。その一人、エロイーズ・マーレンさんが昨年暮れにアメリカへ移住することになり、彼女は横浜で生まれた家具だから横浜へ残していくことが一番と、ダイニングセットほか10点ほどを横浜市に無償貸与した。

現在その家具は、次の住み家が見つかるのを静かに待っている。

## ドレスアップするジャック 横浜市開港記念会館



横浜市開港記念会館の復元工事が進んでいる。「ジャックの塔」で知られる同会館は、大正6年の竣工当初、ドーム付きの壮麗な屋根をのせたルネサンス風の建築だった。ところが大正12年の関東大震災で屋根などが焼失し、昭和2年の復旧工事も出来ない、平らな屋根に変えられてしまった。

今回の工事は、この屋根を創建当時の姿に復元するもので、当時の図面などをもとに震災以前の堂々とした姿を蘇らせる。復元計画は、村松貞次郎氏(法政大学教授)を委員長とするドーム復元委員会の監修のもとに横浜市建築局において実施された。

横浜のシンボルとも言えるこの建物、その歴史を伝える資料室も新設し、市政100周年の今年から第3の人生を歩み始めることになる。

## 着々と進む ライトアップ常設化



横浜を代表する歴史的建造物などを、光によって美しく照らし出すライトアップ。横浜市およびヨコハマ夜景演出事業推進協議会は、この魅力的な夜の都市景観を恒常的なものとして定着させるため、昭和62年度から投光器の常設化を推進している。すでに横浜市開港記念会館(昭和62年度)や神奈川興行(昭和63年度)等が常設化を完了、昨年のクリスマスには横浜海岸教会も新たに加わり、平成元年2月現在14棟の建物が毎晩10時まで夜間に浮かび上がり、街行く人々の目を楽しませている。

## ヨコハマ 洋館探偵団が発足

1988年の春、横浜の西洋館を愛する市民8人が集まって「横浜洋館探偵団」を結成した。7年経って来た「横浜の洋館を愛する会…あしたは会」の後を継いだもので、女性主体の新しいメンバーによって、活動を始めた。横浜の西洋館への理解を深めるには、まずPFIからと、会のネーミングは有名な「建築探偵団」から(無断で)借用。講座やウォッチングなどの企画を催すにつれ、団員も60人に増え、今後は洋館の調査研究も予定している。また伝統的な横浜の建物に興味のある方に対して、西洋館ウォッチングの出前も引受ける。

連絡先(中区開港門2-2-25 崎田昌子さん)

# 景観保全 という デザイン

西 和夫

神奈川大学教授・横浜市歴史的資産調査会長

横浜市の歴史的資産調査会が発足した。調査・提言などの活動がさっそく始められたが、国際都市横浜の町づくりに大いに役立つにちがいない、喜ばしい。しかし問題は、活動が「歴史を生かしたまちづくり」に生かされるかどうかである。調査会と市民が一体となって都市横浜を育てていかねばならない。

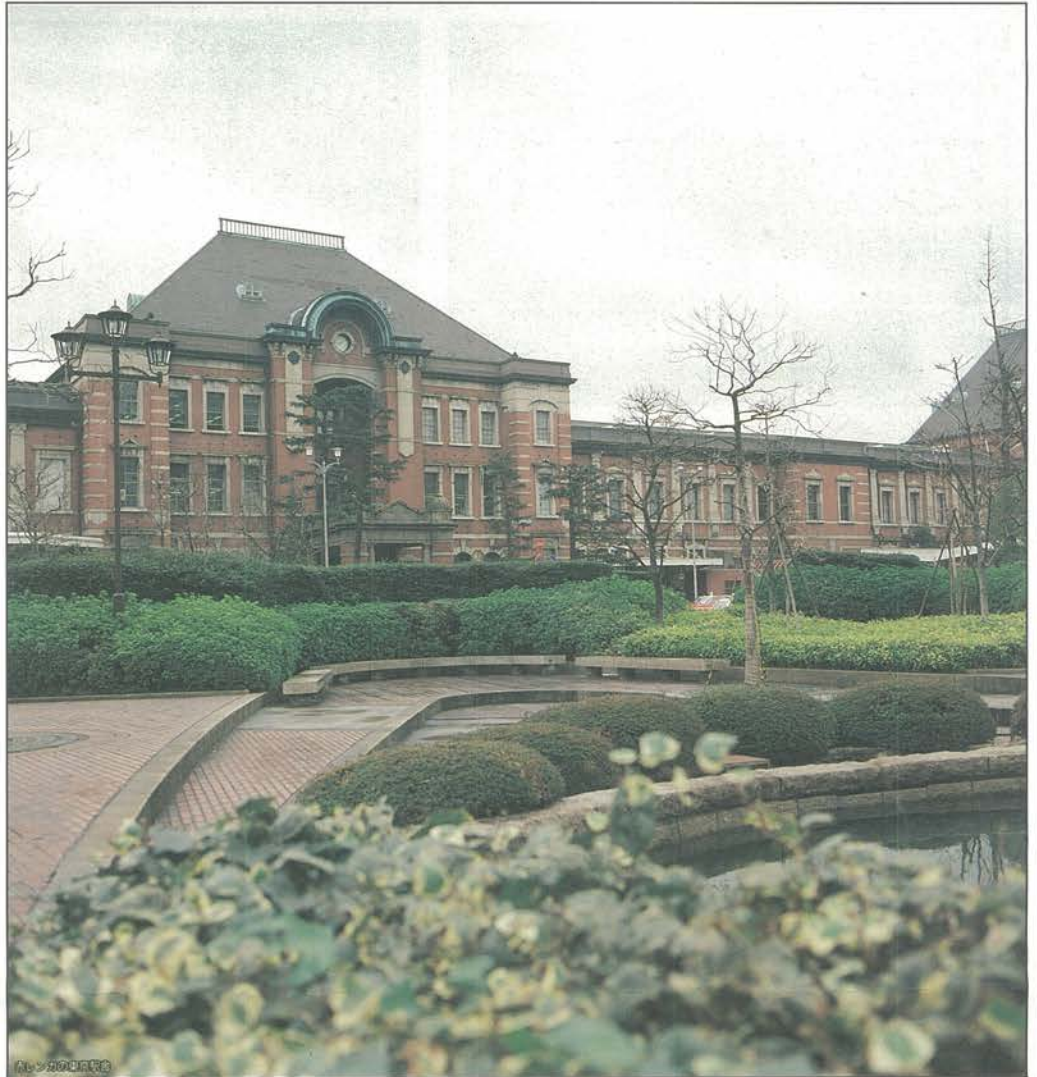
調査会の活動で重要な位置を占めるのは歴史的景観の保全である。今、我国ではあちこちで景観保全が進められている。近年話題になったものだけでも、JF東京駅丸の内線の銀行協会の取壊し問題、小樽運河埋立てと運河沿いの倉庫取壊し、京都三条の旧日本銀行の文化博物館としての再生など、例は多い。

横浜も例外ではない。日本火災横浜ビルの再生、開港記念会館の建設当初の姿への復原、横溝家住宅の保存再生など、多種多様である。その中心となるのはいわゆる近代建築で、ちょうど老朽化の時期を迎え、取壊す計画が次々に出されている。都市のランドマークとして長年市民に親しまれ、愛されてきたものが多く、いずれも先人たちが我々に遺してくれた遺産として貴重な存在である。万事経済効率優先の現代ではともすれば消滅しがちだが、高度成長の波を受けて古き良き建築をあとという間に失った我々は、歴史と文化の厚みを欠く都市がいに寂しいものか、痛いほど知らされたはずで、その消滅を黙って見送すわけにはいかない。

しかし、口先で観念論を展開していてもはじまらない。都市は生きものであり、変化し、進展するのは当然である。景観保全は、都市が変化するものと認識した上で進めねばならない。具体的にそれはどういうことなのか。

景観保全は、古いものを残すということを超えて、都市デザインのひとつだということ認識する必要がある。今、存在する建築を壊さないというだけの消極的なことでは保全は成り立たない。新たな都市、優れた、魅力ある都市を作り出すためのデザインの一環として積極的に保全を行うのである。

新しい建築を作ることだけがデザインだと思いがちだが、あらゆるデザインが先人たちの遺産の上に成立している。建築も例外ではない。絵も彫



市庁舎の中央広場

刻も、あらゆる芸術がそうなのである。芸術に対する考え方、思想、表現の方法や技術、使う素材、すべて先人たちが苦勞して獲得した成果の上にある。優れた景観は、都市デザインのための素材であり、思想の反映である。

都市景観は、都市設計上の素材であると同時に人々の心の中の財産でもある。絵や彫刻とちがって、いつでも、誰でも見ることでできる財産である。景観の所有者は市民全員であって、建物の所有者は景観の所有者ではない。建物を壊す権利があるとしても、景観を破壊する権利はない。

景観が市民共有の財産だとすれば、それを保全する義務もまた市民は持つことになる。都市をよ

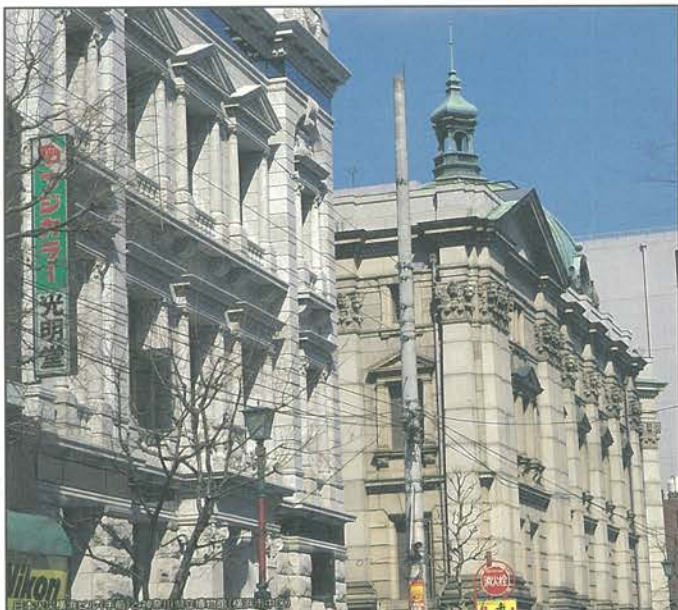
り良くするためのデザインを、市民は常に心掛ける義務を背負う。

あなたが町を、水辺を、緑の森を、あるいは社寺などの歴史的建造物を見て「素晴らしいな」と感じたら、それはすべて優れた景観であり、あなたはそれを所有し、保全する仲間のひとりになっていく。横浜をより良くしていくデザイナーのひとりになったのである。

市民ひとりひとりが都市の優れたデザイナーになったとき、都市横浜は素晴らしいものになる。そのとき、横浜市都市デザイン室は不要となり、歴史的資産調査会もまた無用となる。その日が早く来ることを願ってやまない。



市庁舎の中央広場



日本大通り沿いの近代建築と市庁舎の中央広場

## 横浜市歴史的資産調査会の 設立について

### ●横浜市歴史的資産調査会名簿

- (顧問)  
村松貞次郎 法政大学教授(近代建築)
- (顧問兼調査委員)  
坂本勝比古 千葉大学教授(近代建築)
- (調査委員)
- (会長)  
西 和夫 神奈川大学教授(社寺)
- (副会長)  
宮村忠 関東学院大教授(土木)  
稲葉和也 東海大助教授(古民家等)
- (監事)  
吉田鋼市 横浜国大助教授(近代建築)
- 関和明 関東学院大助教授(近代建築)  
大方潤一郎 横浜国大専任講師(都市計画)  
高橋志保 神奈川大教授(都市デザイン)  
伊東重信 横浜市勤労福祉財団(民俗学)  
堀 勇良 横浜開港資料館(近代建築、都市史)  
内山哲久 財)環境文化研究所調査役(保存制度)  
米山淳一 財)観光資源保護財団専業課長(まちなみ保存)  
(事務局)  
横浜市都市計画局都市デザイン室内  
横浜市中区港町1-1 ☎045(671)2023

横浜市歴史的資産調査会は、横浜市内に現存する歴史的資産の調査研究およびその普及啓発活動を行ない、横浜まちづくりの推進に資することを目的として、この趣旨に賛同する研究者等13名により昭和63年11月10日に設立されました。

その具体的な活動内容は、

- ①市内の歴史的資産(社寺、古民家、近代洋風建築、土木産業遺構、歴史的地区等)の保全と活用に関する調査研究
- ②前項の調査研究によって得た成果等の、セミナーの開催、広報印刷物の発行等による普及啓発活動
- ③その他設立目的遂行に必要なことです。

この活動の一環として、平成元年3月18日には開内周辺の近代洋風建築の見学会およびセミナー(於:横浜開港資料館)を開催。来年度も、こうした企画を年3回程度行う予定としています。また、この新聞も同会の編集。

今後も、さらに活動を充実させてゆきますので、ご支援のほど、よろしくお願いたします。

# 関内の近代建築ガイド

解説 吉田鋼市 横浜国立大学助教授

横浜には、三百数十におよぶ明治以来の近代建築が残されている。中でも、関内・山手地区の近代建築が質量とも他を圧しているが、ここでは関内の13の名建築をとりあげよう。それらのほとんどすべては、日本大通りと本町通りと馬車道通りに面して立ち、この3本の道を中心に近代横浜の歴史が展開したことを物語っている。建築は歴史の生き証人であり、その歴史性によってまちなみに厚みを加え、潤いと美しさを与えているのである。

撮影：米山洋一



① 赤レンガ倉庫(明治44年)

ヨコハマがかつて日本の玄関であったことを如実に示すモニュメント。大きさにおいても形においても、文句なしにわが国煉瓦造建築の横綱。煉瓦造と言わずとも近代建築の代

表作。まことに堂々としていて、しかも優雅。脚を経て魅力を加えた赤煉瓦の壁は、多くの人目を引きつけてやまない。だからファンの数も随一。



② 横浜税関(昭和9年)

港ヨコハマの核。港に入る人が最初に目にする建物であり、港から出て行く人が最後に目にした建物。つまり港の顔。昔は、たいていの外国人が横浜港から入国したから、日本



③ 日本火災横浜ビル(大正11年)

現在工事中だが、間もなく、馬車道通りと井天通りの2面の外壁を復元保存して高いビルが建つ。「歴史を生かしたまちづくり」の最初の成果でもある。横浜ゆかりの建築家矢部

又吉が、向かいの県立博物館に負けじとがんばって建てた様式建築の傑作である。さて、どのような飾り方をするか、みんなで心待ちにしよう。



④ 県立博物館(明治37年)

近代建築では県内唯一の重要文化財。明治建築界の巨頭妻木栄典の設計になるわが国様式建築の代表。わが国における古典主義様式学習の総決算。震災にも戦災にも耐えたホン

モノの石造りの建物で、その重要さはいくら言っても足りない。それなのに愛称がないのは寂しいから、これを「エースのドーム」と呼ぼう。これで横浜建築トランプの絵札は揃いである。



⑤ 横浜農林水産合同庁舎(大正15年)

キーケンの名で親しまれた旧生糸検査所の建物である。戦前の横浜の公共建築で最大。わが国の貿易を支えた生糸輸出の最盛期に建てられた巨大な記念碑。プランも、モニュメ

ンタルな建築に通例のH型で、実に堂々としている。三井物産ビルを設計した遠藤隆英の晩年の大作。間もなく建てかえられるが、外壁を保存復元の方針。



⑥ 富士銀行横浜支店(昭和4年)

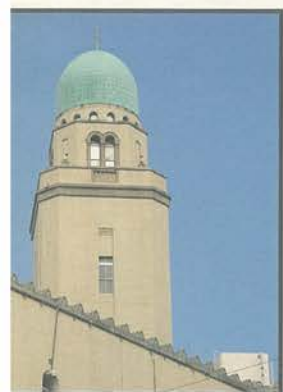
本町通りと馬車道通りが交わる重要な角地にたつ得難い銀行建築。大きなトスカナ式円柱と、ルスティカと呼ばれるゴツゴツした石積みの外壁が特徴だが、中でも見ものは後者。

これだけ広い石積みは珍しい。ルスティカはルネサンスのイタリアの都市邸宅でよく用いた柱と、ルスティカと呼ばれるゴツゴツした石積みの特徴だが、中でも見ものは後者。

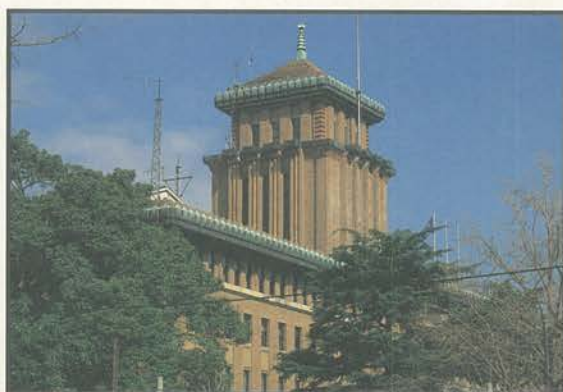


⑦ 横浜銀行協会(昭和11年)

典型的なアール・デコの建築。壁面の要所要素につけられたテラコッタの装飾が美しい。全体の調子もシックでめめけていて、そう呼ぶにはちょっと大き過ぎるかも知れないが、



の顔でもあった。イスラム寺院風の形をした塔は、愛称クイーン。一見クールだが、その名の通り、時になまめかしい。細部意匠の美しいアール・デコ期の傑作。



④ 神奈川県庁本庁舎(昭和3年)

言わずとしたキングの塔。日本大通りのかなめ位置に四面をさらし、厳然としてたつ。外壁のスクラッチタイルとテラコッタが、褐色のアンサンブルを奏でる。昭和63年、選設計画は公募され、398の応募案から選ばれた秀作。以後、他の多くの県庁舎のモデルとなった。作。以後、他の多くの県庁舎のモデルとなった。外壁のスクラッチタイルとテラコッタが、褐色のアンサンブルを奏でる。昭和63年、選設計画は公募され、398の応募案から選ばれた秀作。



⑤ 横浜市開港記念会館(大正8年)

かつて外国人居留地として日本人町との接点であった意味深い位置に、開港50周年を記念し、市民の基金によって建てられた。文字通り、横浜市民のシンボル。その前身たる町会所の時計台をしのばせる塔は、愛称ジャック。石と煉瓦の紅白の組み合わせが華やかな雰囲気を出し出す。現在、市政100周年を記念して、ドームを復元中。(写真は完成予想図)



⑥ 横浜開港資料館(昭和6年)

もとのイギリス領事館。設計もイギリス本国で行なったらしく、きちんとしたクラシックスタイル。ジョージ朝期の英国紳士を思わせる。2本の大きなコリント式円柱がたつ正面入口のデザインは、ハロック調で魅力的。中庭のたまくすの木は震災の生き残りで、この木の下で日米和親条約が結ばれた。つまり近代外交発祥の地でもある。



⑦ 横浜海岸教会(昭和6年)

わが国最古のプロテスタント教会につながる由緒ある教会堂。明治8年築造という鐘がいまも開港広場に鳴り響く。その鐘をおさめる白い鐘塔が正面中央にたっているが、この塔は独特のプロポーションでまことに個性的。一粒の真珠を思わせるその清楚な姿には、思わず心が吸い寄せられる。横浜生まれの建築家雪野元吉の設計。



珠玉の小品という形容をしたくなる。建築史上名高い先代の銀行集会所を立新に引き継いだ佳品。横浜高等工業教授であった林家蔵の設計である。



⑧ 三井物産横浜ビル(明治44年)

躯体のすべてを鉄筋コンクリートでつくったわが国最初の建物としてあまりに有名。当時最新のデザインを施したわが国オフィスビルのさきかげ。明治の建築とはとても見えな



⑨ 横浜商工奨励館(昭和4年)

その名の通り、関東大震災後の横浜商工界の復興を奨励する目的で、市によって建てられた。ホテル・ニューグランドと同様なスタイルの、アール・デコ期の大規模建築。県庁のはす向かいという格要な位置にたち、かつてはハマの産業界のかなめであった。しかし13年前からほぼ空家で、優雅な壁面に見入る人も少なく寂しい。

# ミナトに生きる土木遺産たち

「横浜」という地名から港を連想する人は多い。事実横浜は、安政6年(1859)の開港以来の国際的貿易港で、その発展にもなって様々な港湾施設が築かれてきた。今も港のあちこちに各時代の技術を反映する遺産が見られ、これらを一巡することで港湾計画や土木技術の発展を系統的にたどることができる。

ここでは横浜港を海から眺め、今に遺る主な土木・産業施設をご紹介します。

## ① 横浜港内防波堤と赤灯台・白灯台

明治20年代の、H・S・パーマー設計監督による第1次横浜築港工事の遺構。赤灯台・白灯台は鉄道で、赤灯台は当初どおり防波堤の北水堤先端に、白灯台は当初位置から山下公園水川丸棧橋に移設され、両者とも現存している。

## ② 横浜港防波堤灯台

昭和14年建設、鉄筋コンクリート造。第3次横浜築港工事の遺構で、赤・白2基の愛らしい灯台。

## ③ 日新運輸倉庫護岸

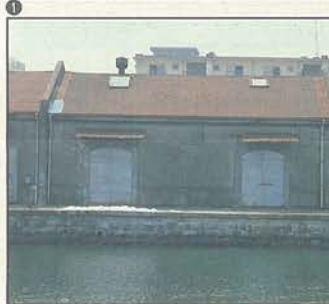
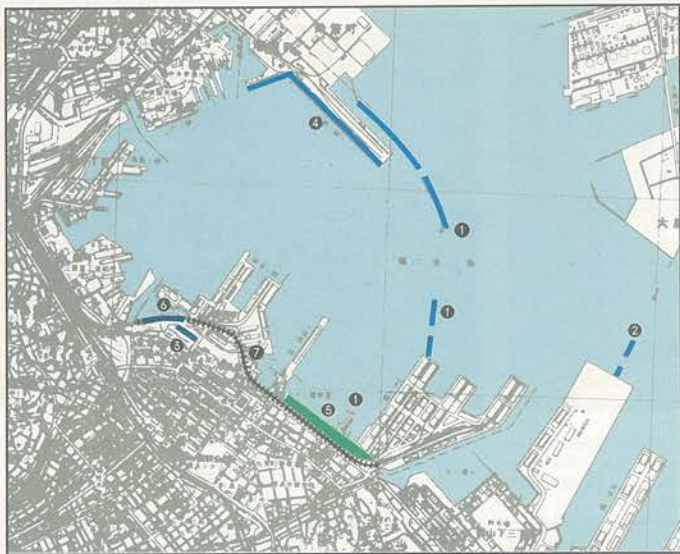
開石練積護岸。明治6年(1873)築造の旧日本波止場の位置を示す遺構として貴重。

## ④ 瑞穂埠頭

関東大震災後の第3次横浜築港工事の遺構。鉄筋コンクリート壁体によって築造され、昭和初期港湾土木の技術的水準を示す。

## ⑤ 山下公園

関東大震災の瓦礫によって埋め立てられた臨海公園。幅約90m、延長約770m、面積約74000㎡。昭和5年(1930)3月15日に開園。



## ⑥ 横浜博覧会臨港線に乗って、土木遺産をたどろう。

平成元年3月25日から開かれる横浜博覧会(YES'89)。会期中、日本丸駅～山下公園駅を結ぶのが横浜博覧会臨港線。明治調のディーゼルカーを走らせることで評判を呼んでいるが、その路線が横浜港内の土木遺産を点々と巡っているのも見過せない点のひとつ。

たとえば、日本丸駅をでてから最初に渡る港1号・2号橋梁(⑨)。この2つの橋は、ともに明治40年、アメリカン・ブリッジ社製、クーバー型と称される米国系トラスの遺構になる。また、この2つの橋が架かる

人工島の護岸は割石練積、橋とほぼ同時期のものである。

一方、最も山下公園寄りに架かる新港橋梁(⑩)は大正元年8月の完成。先の港1号・2号橋梁と異なり、浦賀船渠株式会社製の国産トラス橋で、比べてみると我が国の鉄道橋梁技術の変遷がうかがえる。

横浜博覧会見学のひとつ、回りをぐるりと見渡して、隠れた土木遺産に目を向けてみてはいかがだろうか。

## 好評発売中

### 都市の記憶 横浜の土木遺産

市内の代表的な土木遺産約60件を写真と解説文で紹介。「旧居留地消防隊の地下貯水槽」や「ジェラール水屋敷地下貯水槽」などが掲載されています。



横浜博覧会臨港線(日本丸～山下公園) 大人400円 子供200円

200×200ミリ 80ページ オールカラー ¥1000  
お求めは、市役所1階市民情報室 04671-3600へ

# 歴史を生かしたまちづくり要綱がスタート

横浜市では、昭和63年4月から市内の歴史的な景観を保全し、活用していくために「歴史を生かしたまちづくり要綱」という制度をスタートさせました。この制度は、市自らが歴史的な資産をたいせつにしていけるとともに、所有者の方々の保全の努力に対し、助成などの支援をしていこうというものです。

この制度には次のような特徴があります。

- 所有者の方の実情を大切に考え、柔軟で弾力的な運用をします。
- 景観上の価値を大切に考え、外観の保全を最優先し、内部はむしろ積極的な活用を望みます。
- 保全のための改修等に最高3000万円(木造以外の建物で、歴史的建造物として認定したものの場合)の助成をします。
- 幅広い保全を図るため歴史的建造物をその価値に応じて、登録、保全契約、認定の3種類に分け対応します。

市では、この制度を対象として、候補約500件を選び、今後所有者の方々と次のような話し合いを進めてゆきます。

## (1)ご相談にのります

### 横浜市の台帳に登録します

台帳に登録することによって、所有者の方と横浜市のお付き合いが始まります。

まず台帳を整備するため、簡単な調査をさせていただきます。これをもとに、横浜市は建物をたいせつに使用していただくための情報をご提供したり、維持管理などのご相談をお受けいたします。

もし、大規模な改修等をご計画になるならば、実施前にお知らせください。長く使用していくためのよりよい方法を、一緒に考えたいと思います。

## (2)10年以上の保全に助成します。

### 保全契約の締結

市長がまちづくりのうえで、その歴史的建造物を末永く保全活用することが必要と認められたものについて、横浜市と保全契約を結ぶことができます。期間は最低10年間です。

これは、あらかじめ建物の調査をして、専門家の評価を得たうえで保全する必要のある部分とそのデザイン、構造、材料などを決めます。そして、それらを保全していくことについて所有者の方と市が契約を交わすものです。この契約内容に基づき行なわれる改修等について市は助成します。

## (3)半永久的な保全により多くの助成をします。

### 歴史的建造物の認定

歴史的建造物のうち、特に重要な価値のあるものは「横浜市認定歴史的建造物」として認定を受けることができます。

これは、所有者の方と市が協議をし、認定しようとする建物の「保全活用計画」を定め、この計画に沿った保全活用の行為に対し市が助成するものです。計画の内容は、

- ①保全活用方針
- ②保全する外観等の部位、デザイン、構造、材料に関すること
- ③敷地の利用及び木竹などの配置
- ④その他必要なことを盛り込みます。

この計画に関係する改修等を行うときは、市に届出をしていただきます。そして市はその内容について指導助言をすることがあります。

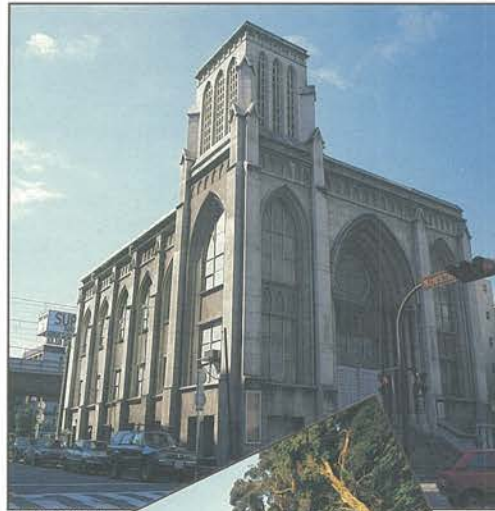
助成の内容も充実し、保全契約にはない毎年の維持管理を加え、改修等にもより高い額を受けることができます。

また、歴史的景観を残す地区についても、この制度は対象としております。地区の指定については、今後居住者の方々とご相談していきたいと考えています。

昭和63年度には、約60棟の「登録」を行なうと同時に、数棟の認定・契約について所有者の方々と協議を進めています。

すでに登録したもののうち、代表的なものは次のとおりです。

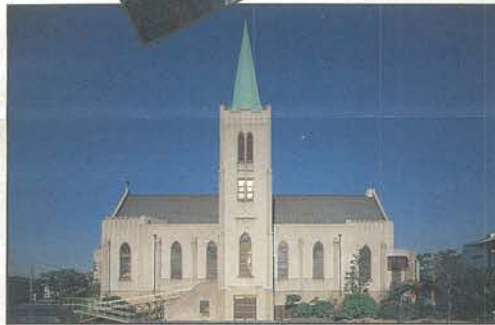
- 神奈川県庁本庁舎、日本火災横浜ビル、横浜指路教会、横浜海岸教会、カトリック山手教会聖堂及び司祭館、横浜銀行協会、戸田平和記念館、弘明寺、富岡八幡宮、師岡熊野神社、春日神社、



横浜指路教会(中区)



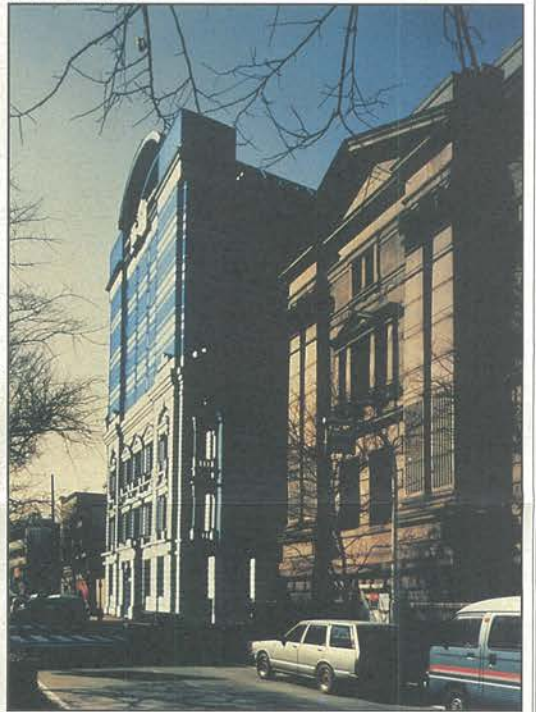
春日神社(港南区)



カトリック山手教会聖堂(中区)



横浜市開港記念会館(中区)



日本火災横浜ビル(中区)

## 横浜市文化財保護条例を施行

市内には、横浜の歴史、文化、自然を理解するうえで欠くことのできない文化財が数多くあります。このような文化財を、後世へ継承していくことは現代に生きる者に課せられた責務です。

しかし、近年急速に進展した都市化とともに、市民の歴史に対する学習意欲の増大等の社会情勢が変化するなかで、従来の施策だけでは、今後よりよい状態で文化財を保護していくことは非常に困難になってきています。

教育委員会は、こうした文化財をとりまく状況のなかで、今後の文化財保護のあり方について、横浜市文化財保護制度調査研究会(会長 成田頼明 横浜国立大学教授)を設置して、横浜市における文化財保護制度に係る基本的な事項の調査、研究を依頼し、昭和62年9月28日に、この研究会から「横浜市文化財保護条例の基本的な考え方とその骨子について」の提言書が提出されました。

本市は、この提言の趣旨を踏まえて、横浜市文化財保護条例を昭和62年12月25日に制定し昭和63年4月1日から施行しました。そして、同年11月最初の市指定文化財が誕生しました。今回の指定は、条例制定後第1回目の指定であるので、市域の建造物の中でも記念碑となるようなものを慎重に選考しました。

文化財保護審議会の建造物部会は、坂本勝比古氏(近代・部会長)、西和夫氏(社寺)、稲葉和也氏(民家)の3名の先生方で構成されています。文化財の所有者の方々の理解の下に、それぞれの分野で1件ずつの指定物件を選ぶことができました。

以下、この3件について、簡単にご紹介をしましょう。



宝生寺本堂



旧横溝家住宅(主屋)



横浜共立学園本校舎

### 宝生寺本堂

(江戸時代)

所在地：南区堀ノ内町

宝生寺は、中世の後北条氏時代、現在の横浜地域の中心域を支配していた平子氏により厚く庇護された寺院で、この寺が所蔵する文書で「横浜村」の名が初めて出てくることで著名です。

### 旧横溝家住宅

(江戸時代末期～明治時代中期)

所在地：鶴見区獅子ヶ谷町

この住宅は、幕末～明治中期までに建てられた主屋・長屋門等の建造物群が周囲の環境を含めて、ほぼ完全に残っています。前所有者、横溝和子氏より建物を市に寄贈いただき、本年度中にオープンをめざして修理工事が進められています。

### 横浜共立学園本校舎

(昭和6年)

所在地：中区山手町

横浜山手は、国際都市横浜の礎を築いた旧居留地であり、この地で明治初期から学校教育を行ってきた伝統あるミッションスクールが、この共立学園です。建物は木造3階建て、ハーフチンパースタイルをとる大規模なもので、第1号指定としてふさわしい建造物といえます。

今後、この条例を生かして横浜の文化財の保護を一層進めていくには、何よりも市民のみさんの文化財に対する理解と協力が必要です。

市、市民、所有者が相互に協力しあい、横浜の豊かな文化財を守り育てつつ、更に新しい文化を創造していきたいと考えています。

# 街に、心に、残る面影

横浜最後の居留地建築家 J・H・モーガンと未亡人たまのさん



「J・H・モーガン」といふモーガン・たまのさん夫妻。モーガンにとっては異国の地にあつたが、20年以上の年月が、よりたまたまの心をつけたよふと

大正から昭和初期、横浜を中心に活躍したアメリカ建築家J・H・モーガン(1877~1937)。横浜最後の居留地建築家と呼ばれ、横浜・山手町などに数々の名作を残したその人は、山手の外人墓地に眠っている。

横浜に現存している代表的な作品は旧根岸競馬場、関東学院校舎、セント・ジョセフ・ベリック・ホールなど。

一昨年6月6日、没後50年の墓前祭が初めてゆかりの人たちや建築関係者らの手で催され、広く一般の人々にも知られるようになった。横浜の街並みづくりに貢献した業績を考えれば遅すぎたくらいかもしれない。

その折、「設計の仕事は地味なもの。脚光を浴びることは少なかったですから何だか恥づかしいですね」と話していたのはモーガンの未亡人、石井たまのさん(90)だ。

藤沢市大鏡におのの高橋利郎さんの家族と現在も元気に暮らしている。今でこそ一人での外出は困難になったが、数年前まで毎月6日の墓参りはたまのさんの決まったスケジュールだった。おしゃれして一人で出かけ、長い時間墓のそばに座って過ごすのが常だった。

外人墓地のすぐ近くにはモーガン設計の、これも代表的なクライスト・チャーチ(山手聖会堂)がある。「建物が残っているのはうれしいけれど、生きていてくれればもっといいのに。」ベッドサイドには夫妻の写真がいつも立てかけてある。

モーガンが日本フラール建築会社の設計技師長として東京・丸ビル、日本郵船ビルなど建設のため来日したのは1920年(大正9)2月。たまのさんの

(J・H・モーガン)米・ニューヨーク州生まれ。来日2年後(大正11年)にフラール建築会社を退社、東京・日本郵船ビル内に事務所を開設。その後同15年に横浜市山下町に移転。穩健華麗な欧米風の建築様式で、全国に30以上手がけた建物のうち約半数が横浜に造られた。肺炎のため60歳で没。

記憶では、モーガンと結婚したのは20代半ばだが、同年の記載のある日光での写真があり、新婚旅行らしいことから実際は22歳、モーガンは43歳ほどだろうか。来日間もなく二人は出会ったことになる。

「何でかお忘れかもしれませんが東京ステーションホテルの上にあった食堂で声をかけられたの。印象？すてきな人でしたよ。それから後に丸ビルの中を見させてもらいました」

たまのさんは当時では珍しい、英語が使える女性だった。YWCAで学び、証券会社に勤めて英語の速記もこなしていた。その後モーガンが独立して東京、横浜と建築設計事務所を開くとタイピストや通訳として大いに助けとなる。

モーガンは60歳で没するまで27年間日本にいたが、どういふわけか最期まで日本語は話さなかったという。仕事の多くが在留外国人の事務所や住宅、ミッションスクールだったこともあるが、公私共に、いつもそばにいたというたまのさんへの甘えからだったのではない。

モーガンの仕事熱心はよく語られるところで、1937年(昭和12)、彼の死を悼む日本建築士の雑誌には、傍らで資材輸入業を営んだり、また請負業者肌の人ではなく「建築士として終始之(これ)に従事し他の米國人に比して寧(むし)ろ清貧に甘んぜられ」たことが紹介されている。

たまのさんの証言も同様。「家の、それも寝室の隅に図面を書く台を置いて、何か思い出すと夜中でも起きて図面を引いていた」という。もっとも「お金はたいして入りませんでしたけど、ぜいたくするわけじゃなし、家にいるのが好きで遊びに出かけるタチではなかったから困ることもなかったですよ」

夫妻は当初、東京・大森の日本家屋に住み、1933年(昭和8)ころ、藤沢市に洋館を建てて移った。特別に焼かされたというオレンジ色の瓦屋根の、しよしよな平屋建てで、モーガンの死後、手に渡ったものもたまのさんの住む家のすぐそばに残っている。

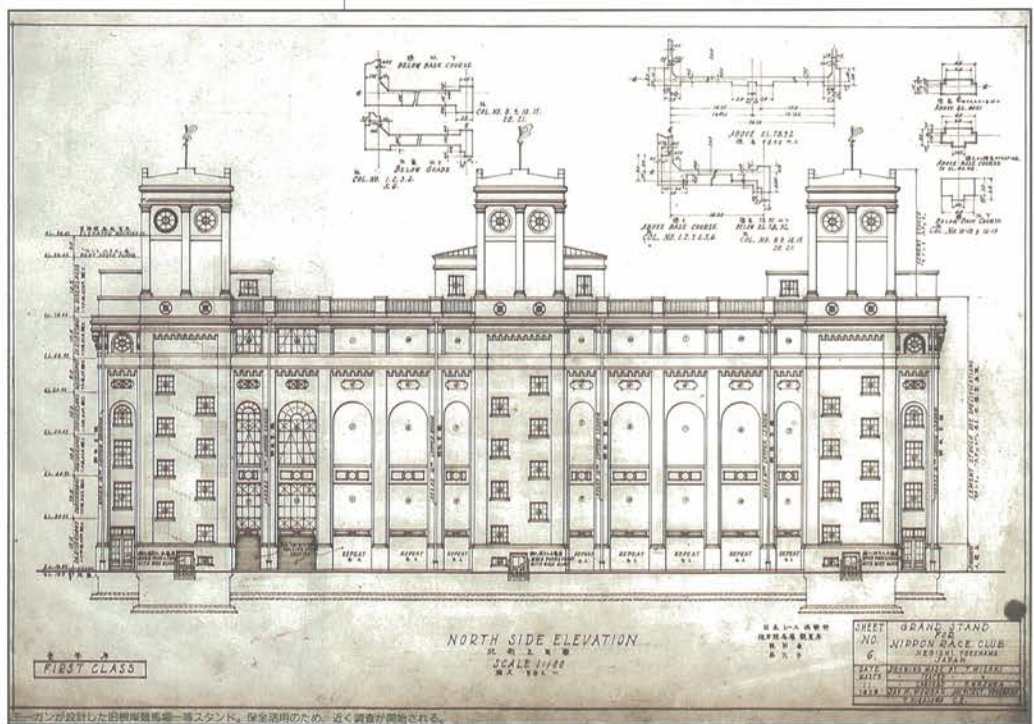
日本の風土を愛し、建築用材料も努めて国産品を用いたと伝えられるらしく、その洋館の内部には床の間や障子などをバランスよく施した。「日本のものは何でも大好きで、うちにいるときは浴衣を好んで着ていました。あんまり似合わなかったけれどね」と苦笑する。モーガンは家では底いじりや一緒に本を読んだりして過ごし、たまにけんかすると地下のワイン倉庫にこもってたまのさんを困らせる茶目っ気もあつた。

明朗快活な人柄であつたモーガンには友人も多く、休みの日には在留外国人らがよく集まった。とにかく夫妻はいつも一緒なので、初めて訪ねた人はモーガンが「たま、たま」と呼ぶのを聞いて猫がどこにいるのかと勘違いしたほどだった。

没後50年以上たった今でも「すてきで優しく、いい人でした。あんな親切な人はいません」と繰り返す、目をうるませるたまのさん。

戦後は請われて米軍の通訳などを務め、一時は接取中の旧根岸競馬場に遭つたこともあるという。何やら因縁めいたこともあつたが、たまのさんの関心は建物より、やはり夫モーガンなのだ。その人への思いは、50年の歳月が余計にそうさせたのだから、懐かしさや思い出といったものより、もっと深く固いものを感じさせる。

モーガンの同様の思いがたまのさんに注がれ、また建築に流れていると自然に思えてくるのである。



モーガンが設計した旧根岸競馬場一階スタンド。保全活用のため、近く調査が開される。